

開催にあたって

今回のコーナー展示では、平成24年度に文書の整理が完了し目録が刊行されたのを機に、戸谷家文書展を開催いたします。

戸谷家は中山道本庄宿に居を構えた商家で、近世後期には江戸にも出店を持つ、関東を代表する豪商として知られていました。

戸谷家の当主は、災害や飢饉に際しての救済活動や、自費での橋の架け替えをはじめとする数々の功績により名字帯刀を許され、本庄宿の宿役人も勤めました。

戸谷家文書は約8,000点にのぼる文書群で、そのうち商業に関する文書がおよそ80%を占めています。本庄という一地方の商家の文書群としては、県内において第一の資料といえるでしょう。

今回の展示では、商業関係文書を中心に展示するとともに、あわせて俳諧関係資料も紹介します。

平成25年6月

埼玉県立文書館

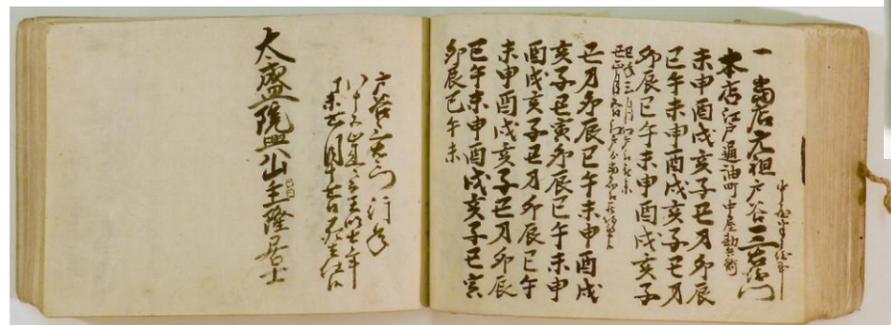
I 商家「中屋」の誕生

戸谷家初代半兵衛光盛は、正徳5(1715)年12歳の時に、叔父左兵衛が勤める江戸の中屋勘兵衛 店に奉公に上がりました。その後、享保18(1733)年に本庄に戻り、中屋勘兵衛店別家「中屋半兵衛店」の名を掲げ、本庄宿新田町に店を構えました。

創業当初は太物小間物類を扱っており、商売が軌道に乗るにしたがい資産も増え、初代光盛の時に中屋の基礎が築かれました。

二代目修徳は安永元(1772)年に跡を継ぎましたが、3年後に30歳の若さで他界したため、修徳の長男光寿が2歳で三代目を継ぎました。そのため、隠居した光盛が後見人となりました。

中屋は初代から三代までの間に商売を拡げ、江戸にも出店を持つ関東有数の豪商に成長したのです。



永代人別帳 【戸谷家883】



II 「中屋」の繁栄

中屋は地元本庄、また江戸から仕入れた商品だけではなく、京都や大坂の商品も取り扱っていました。

そして、宝暦13(1763)年初代光盛の時に江戸日本橋室町(室町店)に、文化2(1805)年三代光寿の時に神田橋御門外三河町(神田橋店)に出店を設けることとなります。

順調に商売を拡げ、経営も安定した中屋ですが、文政期に入ると幕府の経済政策に関連した事業を請け負うようになりました。

文政2(1818)年には、神田橋店の島屋吉兵衛が、幕府から金銀貨幣の新吹金引替御用を申し渡されます。吉兵衛以外では、為替方の三井家をはじめ、本両替の播磨屋新右衛門など17店が申し付けられており、当時中屋が豪商のひとつに数えられていたことがわかります。

それ以外にも、神田橋店では菱垣廻船問屋や大名・旗本に対して、巨額の融資を行っていました。

III 戸谷家と神流川の渡し

商家として繁栄した戸谷家の歴代当主は、数々の慈善事業を行いました。なかでも有名なのが、「神流川の無賃渡し」と呼ばれるものです。

神流川は武蔵と上州の国境を流れる川で、当時この渡河をめぐり数々の訴訟が起きていました。

初代光盛は、幕府に対し「神流川を渡る人々から通行料を徴収することなく、無料としたい」と願い出しました。

その結果、合計200両を幕府に上納し、利子30両により神流川の渡しが運営されたため、通行料を取ることなく、渡河できることとなったのです。

当時の1両は今の約10万円に相当すると考えられるため、200両は現在では約2,000万となります。



神流川無賃渡しの高札 【戸谷家8065】

トピック 戸谷家と俳諧

三代目光寿は、双鳥と称した俳人でした。

光寿は、中央俳壇と地方俳壇、江戸俳壇と上方俳壇をつなぐ役割を果たした人物として知られています。

光寿は本庄の自宅に「小菴庵」という別邸を建て、常世田長翠が一時期この庵に滞在していたことがあります。

光寿の母や姉も俳諧を好み、四代目光敬・五代目光孝も俳人でした。戸谷家の人々は俳人との交流だけでなく、絵師や文人などの芸術家とも親しく交遊を重ねていました。